

ふるさと

第28号



ふるさと麻生八景：王禅寺

目次

2019 第2回麻生ふるさと交流会 ……	(1)
・講師：佐藤次郎 様	
“100年前のオリンピック”：講演要旨 ……………	(5)
軍艦島を紹介します ……	(9)
あさお落書き消し隊が表彰！ ……	(14)
田中元介さんがメデイあさおに！ ……	(15)

発行：2019年10月5日（第28号）
発行：麻生ふるさと交流会事務局
担当：平塚 征英、横田 彰夫

麻生ふるさと交流会

た

表紙写真：平塚 征英 さん
タイトル：ふるさと麻生八景：王禅寺
年 月 日： 2019. 9. 27
場 所：麻生区王禅寺
記 事：来年は子年 3 3 観音霊場の
ご開帳とのことです。西門前に
白いヒガンバナが咲いていました。

「麻生ふるさと交流会」ホームページ

<http://web-asao.jp/hp2/asao-furusato/>

2019年度・第1回麻生ふるさと交流会

場 所:麻生市民交流館 やまゆり

日 時:2019年7月20日(土)

13時30分~17時00分

参加人数:27名、懇親会:23名

第1部 麻生ふるさと交流会:.....(13:30~15:50) 司会 辻村副会長

1. 開会の辞.....辻村副会長

- ◇ 今回も松本会長欠席のため副会長よりご挨拶がありました。
- ◇ 例年と違って長い梅雨が続いています。最近明るいニュースがなく暗いニュースばかりですが、明るいニュースがあります。アポロ11号から50年になります。
- ◇ 今回はオリンピックの話で講師

の佐藤次郎様の紹介がありました。



2. 講演会:演題“100年前のオリンピック”.....(13:35~15:15)

- ◇ 記者人生は東京新聞でスポーツ担当。ヤマユリのスタッフとして活躍している。



- ◇ 初出場では完敗だったが、1920年のアントワープではテニスで熊谷一彌選手が銀メダルを獲得した。

- ◇ いだてんの話。初めてのオリンピックは2人、ストックホルムで。
- ◇ 情報は何もなく、トレーニングの方法・オリンピック自体が何かも解らなかった。荒野をすべて自分で切り開くサムライだったのか。
- ◇ 三島彌彦の事、金栗四三の逸話。三島は陸上の他に水泳・馬術などスーパースターであった。金栗は練習方法などを後世に伝えた。



- ◇ 内藤克俊というレスリングの選手は、1924年パリオリンピックで銅メダルを獲得した。人望が厚く、レスリングは日本の柔道がすごく役に立ち、将来有望な種目になり、スポーツを通じ他

の民族との交流に役に立つだろうと言っている。

- ◇ 当時のオリンピック出場選手は、関西地区・中国・九州地区の選手が多い。これは当時の気候なども影響しているものと思える。
- ◇ 人見絹江選手に関するエピソード。費用の調達は人見自身で行い、無理がたたリ 24 歳で他界した。



- ◇ 初めての出場から 20 年、金メダルラッシュとなりスポーツ強国となった。
- ◇ 東京オリンピック招聘に貢献した田畑政治の事。



- ◇ 1964 年の東京オリンピックの最

3. 麻生ふるさと交流会のあゆみ：
(15:30~15:45) 横田彰夫さん
4. 福島県のお酒 好きです
ふくしまの酒……宮河悦子さん
5. 事務局からの連絡
交流会の歴史などで宮本さんより投

終聖火ランナーの坂井義則さんの事。前日から当日への天気のこと。世界中の青空を東京に。

- ◇ 1964 年東京オリンピックは、古き良きオリンピックの最後の大会であったと言える。その後は行き過ぎた商業主義となって行く。
- ◇ 現在と違って選手と一般人との交流があった。現在の有力選手は選手村へは入らず高級ホテルに滞在する。



- ◇ 今回の東京オリンピックは今までとは違ったものになるのか。今回はパラリンピックに注目したいと思っている。
- ◇ 質疑応答
 - A) 宮本さん:過去のオリンピックの参加選手には関西・九州地区の方が多いのは何故?気候とか?
 - B) 松岡さん:草創期におけるトレーニングの仕方と現在では?
 - C) 横田さん:メダル数に関し、競技数は現在と比べてどうか?

稿、お国自慢など今後交流会を再度盛り上げていきましょう。

今後の予定など。

6. 平塚さんより会報の事:2~3 日後にはホームページ掲載をいたします。
7. 会歌 ふるさとの合唱

第2部 懇親会 (15:55～17:00)

- ◇ 乾杯の音頭は本間さん すっかり元気になりました。
- ◇ 「落書き消し隊」と「うつ病支援の会あさお」の表彰に関する報告
- ◇ 懇親会の締めは田中幹雄さん：三本締めの意味と山形の花笠締めの方法も説明。
- ◇ 今回も多くの方々から、有難い差し入れを沢山頂きました。有難うございました。

日本酒：以心伝心(福井)、瀬祭(山口)
…新井・宮本さん



乾杯：本間さん

講師の佐藤さん





100年前のオリンピック:講演要旨

～初めて五輪に参加した「いだてん」の真実～

佐藤 次郎

世界一のオリンピック好きといわれるのが日本人。その言葉が示すように、日本のスポーツはオリンピックとともに発展を続けてきた。

1912年のストックホルム大会に初参加して以来、選手たちはオリンピックで世界と競うことを最大の原動力として力を磨き、またスポーツファンたちはそれを情熱的に応援してきた。

【黎明期のサムライたち】

そうした日本のオリンピック史の中で、ことに注目したいのが、オリンピック初参加のころの、スポーツ黎明期の選手たちだ。

明治期になって、外国人教師などを通じて入ってきた近代スポーツ。五輪初参加のころは、まだオリンピックという存在さえ一般にはほとんど知られていなかった。

ストックホルム大会で日本初のオリンピックとなったのは、NHK大河ドラマ「いだてん」で脚光を浴びた金栗四三と三島彌彦。



東京帝大生だった三島が「帝大生ともあろう者が、かけっくらのために海外に行っているものか」と悩んだというエピソードが、その当時、スポーツやオリンピックがどのように受け止められていたかを示している。

知識も情報もなく、指導者など見当たらない時代。選手たちは全て自分で考え、工夫して大会に臨まなければならなかった。

金栗は、長距離トレーニングの方法を知らないまま、水分を全く取らないで猛練習に励み、あわや体を壊す寸前に至っている。練習さえも命がけだったというわけだ。



だが、黎明期の開拓者たちは、世界に伍して戦いたいという情熱を原動力として、未知の荒野を独力で切り開いていった。

金栗は、オリンピックで惨敗するたびに敗因を分析して課題克服に励み、長距離トレーニング法を確立して後輩に伝えた。のちに「マラソンの父」と呼ばれたのはそれゆえだ。

日本初のオリンピック金メダリストとなった織田幹雄は、陸上競技という名称が一般的でないころから独自の練習を重ね、快挙をなし遂げた。



女子初のオリンピック代表となった人見絹枝は、自らの命を削って女子スポーツの発展に力をそそぎ、その無理から24歳の若さで夭折した。その奮闘は、未知の大海原に船出した中世の冒険家や、決死の覚悟で武者修行に出た武芸者を連想させる。



黎明期の選手たちは誰もが一騎当千のサムライだった。軟式の技術を硬式に生かして日本勢のオリンピック初メダルをもたらしたテニスの熊谷一彌。



日本で競技が始まる7年も前に、米留学からオリンピックのメダリストになったレスリングの内藤克俊。



よく知られている馬術の西竹一は、海外でも「バロン西」として知られるスケールの大きさを持っていた。



こうした個性的な実力者がどの競技でも育ち、日本はスポーツ強国の一角にのし上がっていく。そのひとつのゴールとなったのが、東京への夏季オリンピック招致だ。

【幻の東京オリンピック】

1932年のロサンゼルス大会で好成績をおさめた日本は、その勢いを駆ってオリンピック招致を目指し、1936年のベルリン大会開幕前に開かれたIOC総会で1940年夏季大会の開催権を射止める。

対抗馬のヘルシンキを9票上回っての勝利だった。当時の新聞に躍った「吾等の待望實現！」「東京に凱歌 極東に翻る初の五輪旗」「勝った！ 日本晴だ」の見出しが当時の高揚を物語っている。



その裏にあったのはこんなエピソードだ。日本は、最大のライバルと目されたローマに開催を譲ってもらう戦略を立て、当時のIOC委員だった副島道正伯爵をイタリアに送った。

ところが、時の首相、ベニト・ムソリーニに面会するため、首相官邸に赴いた副島伯爵は、そこで急病に倒れてしまう。3週間後、本復しないまま再び官邸を訪れた副島伯爵は、「40年大会を東京に譲ってくれれば、44年大会がローマになるよう努力する」と熱弁をふるって依頼。

ムソリーニは「Will You? Will You? (そうか、そうしてくれるのか)」と上機嫌で答え、願いを聴き入れてくれた。思わぬ急病がライバル国の独裁者の同情を買い、招致成功につながったというわけである。



だが、これは拡大する戦火によって、あっけなく幻となった。1938年、開催権返上。

結局、40年大会も中止となる。戦争の前に、平和の祭典ともいわれるオリンピックはまったく無力だった。

ここから、日本のスポーツ界は長い空白を余儀なくされることになる。

【悲願成就】

戦後、敗戦国である日本のスポーツ界は、しばらく国際スポーツへの復帰を許されなかった。

そこで、オリンピックに出場すれば間違いなく金メダルが獲得できた実力と記録を持ちながら、涙をのむしかなかった悲劇も生まれた。競泳の古橋廣之進だ。

1948年、圧倒的な力を示しながら、戦後初のロンドン五輪への出場を阻まれた「フジヤマのトビウオ」。そこで、当時の日本水連会長だった田畑政治（「いだてん」の一方の主演）は、こうしてその無念を晴らした。



ロンドンの水泳競技と同じ日に日本選手権を開き、どちらが速いかを世界に見せつけようとしたのである。1500メートル自由形で、古橋はロンドンの優勝者の記録を実に40秒以上も上回ってみせ、田畑の狙いはずばりと当たった。

そうした雌伏の時代をへて、戦後19年で実現した1964年の東京大会。

聖火最終ランナーとなった坂井義則は、自らの経験から、しばしば、「あの時は、みんなが一丸になっていた」と語っていた。



もちろん開催反対も異論もあったが、国民・都民の多くが「自分たちの」オリンピックだという意識を持っていた大会だったのではないか。

戦後復興のシンボルとして、社会全体がオリンピックを我がものと思っていたのが東京大会だ。だからこそ、その記憶はいつまでも色あせなかったのだろう。



もうひとつ、よく語られるのが「オリンピックらしいオリンピックの、最後の大会」という言葉だ。



まだ商業主義に染まってはおらず、政治の影もさほど表に出てこなかった時代。「世界の大運動会」という、古き良きオリンピックの香りが東京にはあった。それも、この大会を忘れがたいものとしている。



【そして2020年東京は？】

日本初参加から107年。オリンピックは商業主義の導入やドーピングの横行、大国の政治的思惑の影響などで大きく変貌した。

かつてない発展と繁栄を謳歌する一方で、カネのかかる、超大都市でなければ開けない大会となり、地元住民に歓迎されざる存在ともなっている。

これからオリンピックはどうなっていくのか。

2020年東京オリンピックは、そこに何らかのヒントをもたらすことができるのか。

残念ながら、東京大会がこれからの五輪像を指し示すことはなさそうだ。

そこで注目したいのがパラリンピックだ。

こちらも時代に沿って変化しつつはあるが、そこにはまだ純粹さが、黎明期の選手がみな持っていたような純粹さが残っているように思える。

また、それは真の共生社会を目指すための大きなきっかけのひとつとなり得る。

華やかさではなんといってもオリンピックだが、パラリンピックにはオリンピックと同様の、いや、それをしのぐほどの意味が秘められているとも言えるだろう。

軍艦島を紹介します

谷口 永恭

1. はじめに

郷里の長崎では、先年世界文化遺産に登録された、炭鉱跡の軍艦島が脚光を浴びています。果たして、長崎が産炭地であったことをご存じの方がいましたでしょうか。

長崎県下には、北部の佐世保炭田を北松の中小炭鉱が稼行しました。

また、西彼杵半島北西部沖合の崎戸・松島炭田を稼行する、崎戸・大島炭鉱があり、野母先半島の沖合の高島炭田には、伊王島・二子島・高島など、多くの離島炭鉱がありました。

そこで、最近になって観光地としても

人気が出てきた、島影が戦艦に似ているところから、軍艦島と呼ばれる端島（はしま）炭坑を紹介します。

2. 端島炭礦は幕末から稼行されてきました。

オペラ「マダム・バタフライ（蝶々夫人）」は、長崎を舞台に、アメリカの海軍士官ピンカートンの帰りを待ちわびる蝶々夫人の悲恋が描かれています。

グラバー園の蝶々夫人が指さすのは、当然、海の向こうのアメリカの方向と思うでしょうが、実は園内のトイレの場所です。



長崎グラバー園内蝶々夫人の像



蝶々夫人が指さすのは？

実状はさておき、長崎の海域には世界遺産に登録された、炭鉱跡（軍艦島）があります。炭鉱の開発には、余り知られ

ていませんが、トマス・グラバーと密接な関係がありました。



グラバー園から長崎港を望む



グラバー亭

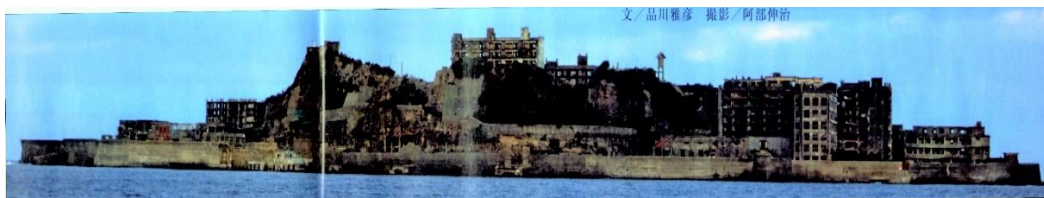
(1) グラバーは、貿易に留まらず、高島炭鉱の事業にも進出しました。

1867年(慶応3年)、肥前藩から経営を委託され、英国の最新機械を導入し、本格的な採掘を開始しました。

その後炭鉱は人手に渡りますが、1881年(明治14年)に三菱が買収しました。三菱は、高島礦業所を高島から開発し

た高島炭礦と端島から展開した端島礦の二つのブロックで稼行しましたが、端島礦は1974(昭和49)年1月に、高島炭礦は1986(昭和61)年11月にそれぞれ閉山しました。

端島は、「明治日本の産業革命遺産」の一つとして、世界文化遺産に登録されました。



坑外の炭礦施設は朽ち果てています



廃墟となったアパート

(2) 端島を軍艦島と初めて表記したのは、1921(大正10)年、長崎日々新聞だったそうです。

大正初期には、日本初の鉄筋コンクリートアパート9階建てが完成しています。

今は、南北480M、東西160Mほどの島で、東京ドームの1.3倍程度の面積ですが、坑外の施設が朽ち果てて、強者どもの夢のあとを見るばかりです。

炭鉱の最盛期には、5,300人余りが住んでおり、人口密度は東京都のおよそ9倍に及びました

(3) 坑外には、「端島坑外施設の配置図面」にみるように、礦業所事務所のほか、立坑櫓・選炭場・扇風機などの鉱山施設があります。

また、6~9階建てのアパート・病院・小中学校・映画館・役場などの建屋があります。

又、図面には表記されていませんが、商店・飲み屋などもありました。

(4) これらが今、廃墟となって、さながら軍艦の姿に見えています。

3. 海底はどのようになっているのでしょうか？

誰しも、見えないところは、どうしても見たい気持ちに駆られます。

そこで、三菱鉱業セメント（株）が編纂した、「高島炭礦史」をひもといてみましょう。

(1) 三菱が経営した明治14年以降、閉山するまでの出炭量実績は、高島地区で約40百万トン、端島で約16百万トン、合計約56百万トンです。

ちなみに、我が国の昨年、2018（平成30）年の石炭輸入量は189百万トンです。



端島炭坑（明治40年頃）

明治40年頃の端島

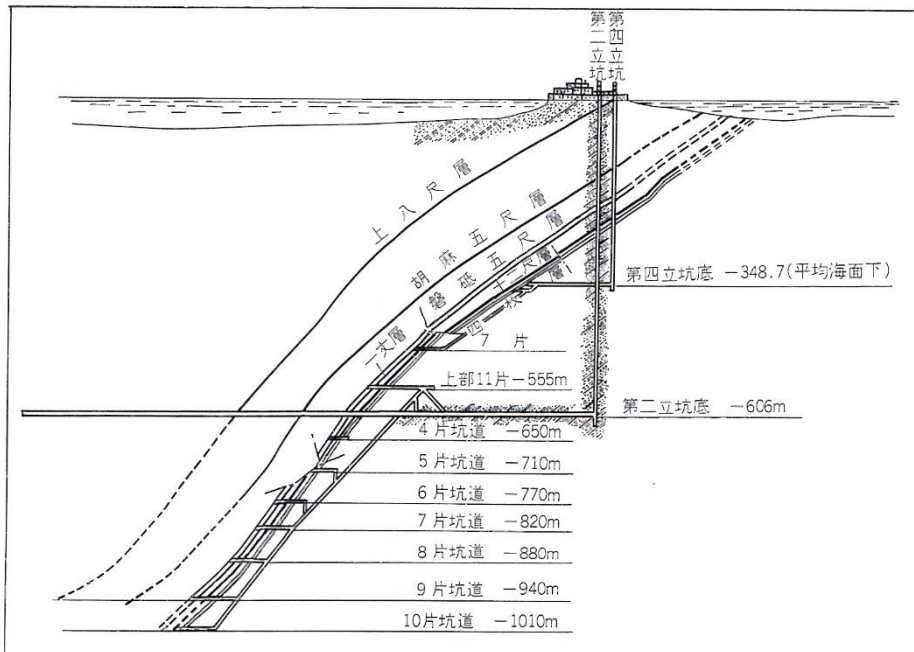


全盛期の端島

(2) 端島で石炭が発見されたのは、江戸時代後期（1810年）で、明治の初めに探鉱が本格化され、明治の半ばには第一立坑の開削が始まり、第二・第三立坑も掘削されています。最終的には、

立坑は海面下600Mまで、そこから斜坑で1,000Mの深部まで掘削され、骨格構造が逐次出来上がり、各レベルの水平坑道で坑内展開されて、採炭が進められました。

第35図 端島炭坑内断面図



端島炭坑内断面図

(3) 「全島位置・採掘範囲図」の斜線の範囲が採炭された箇所です。

島の大きさに比べて、その範囲が広大だったことが分ります。その坑内の奥部まで新鮮な空気を送ることも、重要な作業でした。

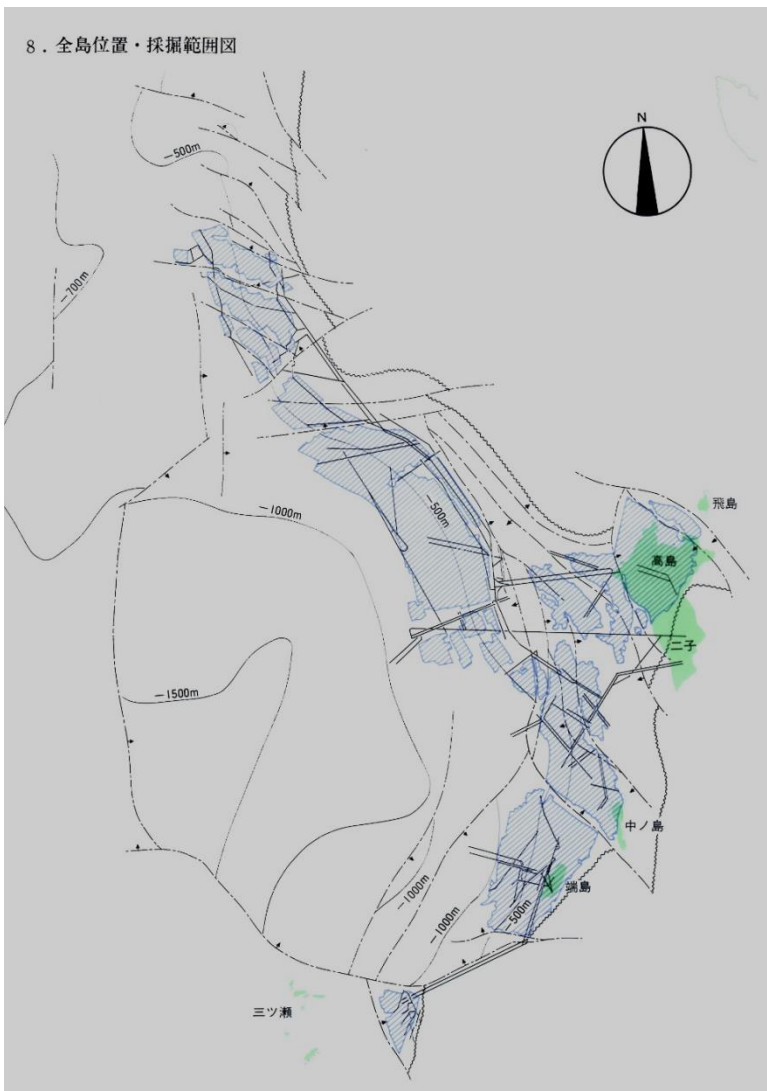
炭鉱での作業は、この通気の他にも、採炭や掘削技術も重要ですが、石炭・掘削のズリ・作業員などの運搬、湧水の排水などを効率よく安全に行うことが重要でした。



斜坑人車



蓄電池機関車と炭車



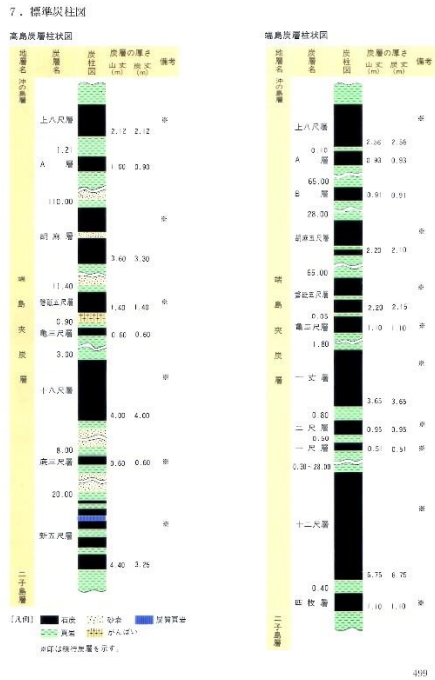
(4) 稼行炭層は、「標準炭柱図」にみるように、高島で6層、累計石炭の厚さは、約15M、端島では9層、累計炭丈は約21Mでした。

採炭技術は時代に伴って進歩しております。

ツルハシでの採掘を思い浮かべられる方もいらっしゃるかも知れませんが、昭和20年代は発破、ピック（圧縮空気

動の掘削機）が主力でしたが、昭和30年代には、ホーベルやドラムカッターなどの採炭機械が導入され、100M以上の長壁の切羽に自走鉄柱枠とコンベアを設置組み合わせて採炭していました。

採掘跡は、フライアッシュ（火力発電所などのボイラーで燃焼する粉炭の燃えかす）、選炭ポタなどを流送充填して、盤圧を制御していました。



炭柱図

10. 高島・端島坑外図—(2)



端島坑坑外図



山本作兵衛が描くツルハシ採炭



自走枠・ドラムカッター・チェーンコンベアを導入した採炭切羽

「あさお落書き消したい隊」が社会貢献者として表彰！

編集部

会員の吉田謙司さんと中村利武さんが活動しておられる「あさお落書き消し隊」が、公益財団法人社会貢献支援財団から、社会貢献者として表彰されました。
「メイ・あさお」9月号の記事を紹介いたします。



不安を取り除く人たち

街角で、家庭で、ちょっと不安だなと思うこと。そのまま放置していたら、いつか大変なことになるんじゃないかということ。そんな日常の不安を取り除く活動をしている人たちがいます。今月のメディはそんな人たちの特集です。

「割れ窓理論」*でまちを守る

あさお落書き消し隊

区内で落書き消しの活動を続けている「あさお落書き消し隊」が、このほど長年の美化活動に対して、公益財団法人社会貢献支援財団から、社会貢献者として表彰を受けました（写真左下）。

新百合ヶ丘駅は1998年に都市景観100選に選ばれましたが、その後は駅前ロータリーに活動もまたすぐに書かれることもありますが、それを繰り返して、しだいに落書きは少なくなっていくといいます。「放っておいたら、新百合ヶ丘はもっと汚いまちになっていったと思う」と隊長の白井勇さん。

現在は年に1〜2回の大規模な落書き消し活動を、麻生区役所や、区役所のホームページなどの呼びかけで集まった区民、近隣の企業などとともにやっているほか、情報を得る度に行う出前落書き消しを実施中です。

問い合わせ ☎044-9655116 区役所 地域振興課。

※割れ窓理論：1枚でも割れた窓を放置して、少しのことで放置しておく



田中元介会員の記事が、「メデイ・あさお」に掲載されたので、ご紹介します。



田中 元介さん

ASAO Himmatsu
うつ病支援の会あさお 代表

あさおビューマン 自分の経験が 誰かの希望になれば

「心の風邪」と呼ばれるうつ病。「それは、誰もがかり得る病気という意味なんです。けれど、風邪なんか話にならないくらいつらいですよ」と話すのは、ASAO健康井戸端会議(3面参照)も参加しているうつ病支援の会あさおの代表、田中元介さん。1947年、兵庫出身。大学を経て石油メーカに就職した田中さん。援の会あさおの代表、田中元介さんは人事業務の一環として、

中元介さん。田中さんは、自らがつ病になり、その経験として完治したという経験を踏まえながら、うつ病当事者やその家族などを支える活動をしています。1947年、兵庫県出身。大学を経て石油メーカに就職した田中さん。援の会あさおの代表、田中元介さんは人事業務の一環として、

て、ストレスからうつ病などになった従業員の回復、職場復帰などを助けてきました。心の病に関する専門講座をいくつも受講し、対処のノウハウも身に付いたことで、当時は「うつ病ってチョロいな」とすら思っていたといっています。

しかし本社勤務になった田中さんが百合丘に新居を構えた次の年、1993年、46歳の時。上司との人間関係のストレスから、自分がうつ病になってしまったのです。「自分がなってみると、勉強してきたことが全然できないんです。元氣な時なら『こうすればいい』と簡単にできたことができなかつた」

解離性大動脈瘤を併発しますが、それでも「うつ病の方が比較にならないくらい苦しかった」のだとか。抗うつ薬を中断したところ「死ぬしかない」と思い詰めて自殺の準備もしましたが、病院の先生に止められて、田中さんは以前学んだことを思い出します。「うつ病は『死ぬしかない』と誤ってしまいう病気のなのだ」と。

「大動脈が裂けてもいいから」とお願いして抗うつ薬をもらい、やっと少し楽になった田中さんは、「この知識がなければ自分は自殺していた。病気がよくなったら、この知識を伝える活動をした。」

2005年には会社を退職。会社のストレスから解放されたのに加え、同じころに柴犬「ユータン」を飼い始めました。写真で田中さんが持つパンフレットに写っているのがユータン。その存在に田中さんはいざいざ救われたといっています。「かわいらしくて癒されるところか、そんなじゃないですよ。もう油断も隙もない悪ガキなんです」。それでも、ユータンの相手をしているときはかき切りになり、その分上司との人間関係のストレスや怒りなどを忘れることができたのです。そして2008年、うつ病の症状が出なくなつた(寛解)ことを機に、田中さんはうつ病支援の会あさおを設立。4年後にはうつ病も完治し、昨年は設立10周年を迎えました。

「私が完治したことを、希望だと思ってくれるうつ病の人もいます」と話す田中さん。「私なんか、別に大したことをしてない訳ではないんですが、謙遜しつつも、「この記事も誰かに勇気を与えられるなら」と、本紙の取材に応じてくれたのでした。